

これまでも、これからも 隣人、中華人民共和国



三上 裕史 (みかみ ひろし)

前・在瀋陽日本国総領事館領事

1999年から主に北海道開発局の農業部門で勤務。2013年3月から2016年3月まで在瀋陽日本国総領事館に勤務し、広報・文化、地方交流等を担当。2016年4月から国土交通省北海道開発局開発調整課開発専門官。

中華人民共和国（以下、「中国」）は長い歴史を持つ日本の隣国です。急激な経済成長と共に、国際的に影響力を増しており、色々な意味で世界の注目を集めています。最近では更に訪日観光客の増大、経済成長の減速等々あり、日本は隣国として影響を受け、また影響を与え合う関係にあります。この影響力を増した隣国について、とにかく悪い方向に話題が向かいがちですが、ここで敢えて落ち着いて中国を見つめ直してみませんか。私が赴任したのは中国の東北地域、それでも日本より広いですが、わずかな滞在期間を通しての私見をご報告いたします（冒頭の写真が中国らしくないことは後ほど）。

中国東北地域

中国は日本の25倍以上の面積、10倍以上の人口、2倍以上のGDPのある大きな国です。23省（台湾省は実効支配していない）、5自治区、4直轄市、2特別行政区（香港、マカオ）から成ります。

このうち東北地域は、近代史における「満洲」にほぼ重なり、南から順に遼寧、吉林、黒龍江の「東北三省」を、更に広くは三省の西側の内モンゴル自治区の一部を含めた地域を示します。南は黄海に面し、東は鴨緑江や図們江（朝鮮名：とうまんこう）と長白山（同：白頭山）を隔てて北朝鮮と接し、北は黒龍江（ロシア名：アムール川）等を隔ててロシアと接しています。（図1）

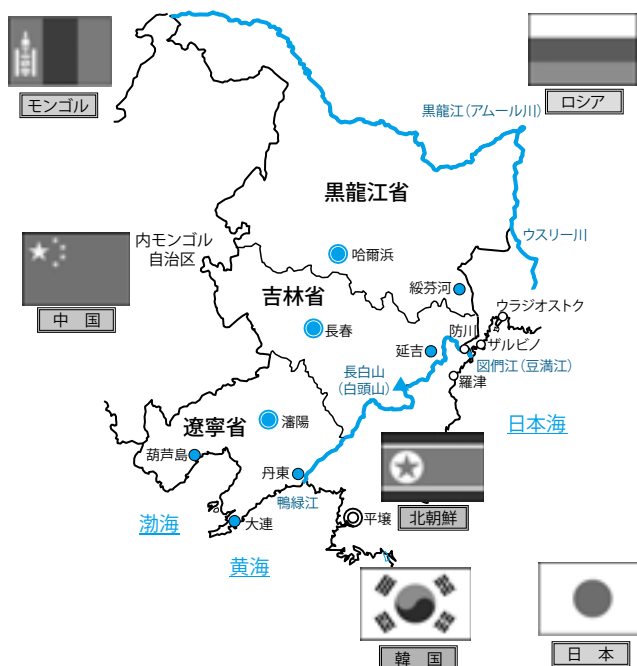


図1 中国東北地域と周辺国

遼寧省の省都瀋陽市は函館市とほぼ同緯度、黒龍江省の省都ハルビン市は稚内市よりも少し北に位置します。遼東半島の先端にある大連市等、遼寧省の海に面した地域以外は内陸性の気候で、寒暖差が大きく、小雨です。春と秋は短く、夏は一年の中では比較的雨が降り、30度を超えますが、全般に湿度が低い^{しづか}ため過ごしやすく、長い冬は雪が少なく乾燥し、北海道を凌ぐ過酷な寒さです。

東北三省は日本の約2倍の面積に約1.1億人が住んでおり、鉄、石炭、石油等の豊富な天然資源を背景とした重工業や米、トウモロコシ、豆類、畜産等の農業が盛んです。また瀋陽にある清朝の故宮、遼寧省葫蘆島市の九門口長城（水上にある万里の長城の一部）、遼寧省と吉林省にある高句麗前期の都城と古墳、といった世界遺産等の歴史を通じた遺跡や長白山等の雄大な自然を背景とした観光資源も多くあります。

日系企業も多数進出して活動しており、現地の雇用確保、技術協力、環境改善等、地域に貢献しています（トヨタ自動車、三菱自動車（エンジン）、安川電機（産業用ロボット）、東芝エレベータ、ブリヂストン（タイヤ、防舷材）、帝人、積水ハウス等。記載し切れません）。



瀋陽故宮（清朝の民族衣装のイベントが開催されていた）

総領事館の業務

まず大使館と総領事館という組織の違いですが、大使館は国を代表する大使をトップに、駐在国政府との交渉を行います（この機能は総領事館にはありません）。この他は両者共に同様の業務を行っているので、表面的な差はほとんどありません（その他違いはあり

ますが、ここでは割愛します）。

改めて総領事館の業務についてご説明しますと、総領事をトップに、管轄地域（在瀋陽日本国総領事館は東北三省）において、在留邦人への各種行政サービス（日本であれば地方公共団体が行う、例えば国政選挙の投票所開設、婚姻届の受領等々）、駐在国地方政府との交流、日系企業や現地企業との情報交換、駐在国国民への訪日査証（ビザ）の発給、日本に関する広報や文化の紹介、訪日留学についての情報提供等を行っています。

私は広報・文化を担当し、館主催の文化イベントの開催や広報活動、館内に学生等を招いての日本紹介、日本留学のサポートのほか、外部機関の主催するイベントへの参加（例えば現地学生の日本語弁論大会、地元地方政府の行う文化イベント、留学説明会等）、日中の地方交流等に関する業務を行いました。

広報・文化活動

外交活動として伝統的に政府同士の働きかけや交渉が行われていますが、近年はこれに加えて広報文化外交（パブリック・ディプロマシー）とも呼ばれる、広報や文化交流を通じて、民間とも連携しながら、外国の国民や世論に直接働きかけ、対日理解の促進、知日派の育成、好意的な対日感情・世論の醸成を促すことも重要視されています。

瀋陽是北京や上海のような民間主導の日本に関するイベントが少なく、日本のモノや情報に直接触れる機会が少ないため、館や日本の自治体の現地事務所等が主催する日本の文化や技術、地域産品等を紹介・広報するイベントが重要です。ここ3年は日中関係が難しい時期にあったため、ある程度訴求対象やイベントの規模が限られました。

具体的な活動としては、文化活動として大学生等を対象とした茶道紹介、和太鼓団体の公演、アニメ製作者の講演会、着物のスタイリストによる講演・着付体験、学術関係者や旅行業者等を対象とした日本酒・日本食の講演会（試食・試飲あり）等を行い、広報活動として現地に進出している日系企業の技術や地元貢献を紹介する講演会、館内の日本紹介スペースに学生を

招いた文化紹介・体験会等を行いました。

日中両国の地方交流と連携した活動も行いました。日中関係が難しい時期でも、ある程度は中央政府と独立して地方間の交流が行われ、特に節目の年に周年事業として交流が盛んになります。近年では2014年の富山県・遼寧省の友好県省締結30周年で石井隆一・富山県知事が、2015年の札幌市・瀋陽市の友好都市提携35周年で秋元克広・札幌市長が各々代表団を率いて瀋陽を訪れて交流活動を行い、館としてもこうした活動と連携して文化紹介等を行いました。

東北地域は歴史的に日本語を学べる学校が多く、社会にも日本語を話す人材が多くいます。学生が発表する日本語弁論大会がいくつも開かれますが、言語は異文化を理解する重要な道具ですので、こうした活動に対して審査員として参加し表彰を授与する等、館として協力することが学生、大会主催者にとって励みとなります。また、こうした学生や父兄に日本留学に関する情報を提供するために、日本留学経験のある現地の方に相談員を委嘱して、留学相談を行っています。
※興味のある方は館のウェブサイトをご覧ください。
<http://www.shenyang.cn.emb-japan.go.jp/index.htm>



和太鼓公演・演奏体験（会場全体で盛り上がり）



アニメ作家の講演（萌え萌えな絵でした）



着物の講演・着付体験（女子は食いつくよう）



日本酒・日本食講演（試飲・試食もあり）



茶道講演・実演・体験（札幌・瀋陽友好都市提携30周年と連携）



第19回瀋陽日本語弁論大会（日本語を学ぶ学生の弁論大会。皆流暢です）

中国東北地域から見た中国

中国は広い国土と多様な民族・文化を持っています。ここでは多様な地域性として、料理ではなく中国語を挙げます。中国語は各地方で発音や語彙、文法が大きく異なっています。北方・西方内陸の北方語と南の沿海部の2つに大別され、更に細かく分かれ、中にはほとんど別言語とも言えるほど違いがあるようです。中華人民共和国設立後、標準語化政策として共通語の「^{プートンファ}普通話」と簡略した字体の簡体字が導入されました。

中国では小学校で普通話とその発音記号^{ピンイン}「拼音」を学びます。しかし普通話は北方語を基本に出来ており、普通話しか分からない人（外国人含む）が南方に行くと、現地に普通話が通じても、現地人同士の会話を聞き取れないという状況がありえます。また、画数の少ない簡体字は覚えやすい一方、簡略し過ぎ（？）で元々の文字が持っていた意味が見えづらくなる、また日本人や繁体字を使う台湾人等にとっては判別が困難となる、といった面があります。（以下、「愛」の例）

中国（簡体字）

日本、台湾

“爱”

“愛”

簡体字では、日本や台湾と違い、愛に、「心」がないといわれます。（「あい」に違いはありません）

人々の性格も地域性があります。日本でも、社交的で商売上手な大阪人、細やかですが保守的な京都人、開放的な東京人等と言われますが（この種のタイプ分けは、個人差をカバーしない場合が多いですが）、中国人にも多様な地域性があります。

東北地域の人々は、寒い地方ほど体が大きいというベルクマンの法則どおり（？）、南方系の人に比べて男女共に背の高い人が多く、また性格も実直な傾向が強いです。酒を飲む・飲ませることが好きな人たちで、アルコール度数40～60%の蒸留酒^{バイチュウ}「白酒」を小さなグラスで一息に空ける「乾杯^{カンバイ}」が酒の席では繰り返されます（最近の都市部では、飲める範囲で結構、という「文化的」な対応が多くなっています）。

また、東北地域は漢族以外に朝鮮族、満族、モンゴル族等々、多様な少数民族がいます（といっても住民の大半は漢族）。館の現地人スタッフにも漢族以外の人が何人もおり、多民族国家であることが感じられます（外見は同じモンゴロイドで、差は余りありませんが）。中国では個人の身分証にも民族の記載があり、少数民族には進学の際の優先枠がある等、多民族による社会の安定のための政策がとられています。

ところで、朝鮮族には多くの日本語学習者がいます。日本語とハングルは文法が似ているため、学習しやすい言語として日本語が選ばれるのだそうです。

中国東北地域と周辺国

前述のとおり、この地域はロシア、朝鮮との関わりが深く、特に国境周辺では多言語表記が目立ちます。写真aの黒龍江省^{すいふん}綏芬河市の店内の看板には、左から人民元、米ドル、ロシアルーブルの記号が書かれており、いずれの通貨も使用できることを示しています。

写真bは吉林省^{えんぺん}延辺朝鮮族自治州^{えんきつ}延吉市の道路標識ですが、漢字、アルファベットと共にハングルが見えます。朝鮮族の多い土地柄が現れています。



写真a 黒龍江省綏芬河市のある店内の表示
（左から中国人民元、米ドル、ロシアルーブル）



写真b 吉林省延吉市の道路標識
（各々、上からハングル、中国語、英語）

写真cは日本海に注ぐ図們江の河口近く、中国、ロシア及び北朝鮮3国の国境近くにある中国領防川の展望台からの写真で、写真中央に架かる鉄道橋の左側はロシア領ハサン、右側は北朝鮮領羅先、河を数キロ進んだ先が日本海で、中国は日本海に面した領土がありません。東北地域にあった中口間の国境問題は2004年の国境協定で解決していますが、現在でも中国側には、ロシアの沿海州はアイグン条約（1858年）や北京条約（1860年）を通じて奪われたとの意見もあります。



写真c 吉林省防川の展望台とそこからの眺め
(中国、ロシア、北朝鮮3カ国の国境)

また、冒頭の写真は哈爾浜市の聖ソフィア大聖堂です。黒龍江省はロシアとの関係が特に深く、同市内にはこの他にもロシア風な建物や街並みが見られます。一番中国らしくない、しかし複雑な歴史を持つ東北地域らしい写真ともいえます。

中国東北地域の中の日本

日本は先の大戦が終わるまでの近代史において、アジア各地を影響下に置き、現在の中国東北地域においては清朝最後の皇帝、愛新覚羅溥儀^{あいしんかくらふぎ}が皇帝となった満洲国を影響下に置いていました。関東州（現在の大连市の一部）を租借地とし、東北地域の交通・物流の基盤となる南満洲鉄道とその附属地の権益を持ち、多くの日本人が政府の方針に従い、開拓団として当時のソビエト連邦との国境地域まで入植しました。

こうした深い関係から、現在でも当時の日本関係の建物を見ることができます。写真d（永田町の国会議事堂のような建物）は当時の満洲国国務院で、現在の吉林大学の基礎医学院、写真eは当時の満洲国皇帝仮御所で、現在の偽満皇宮博物院です（中国は満洲国を国と認めず、「偽の満洲」＝「偽満」と表現します）。



写真d 吉林大学基礎医学院（旧・満洲国国務院）



写真e 偽満皇宮博物院（旧・満洲国皇帝仮御所）



写真f 中山広場周辺の建物（括弧内は昔の名称）

更に、写真fは瀋陽駅の東にあるロータリー交差点と広場ですが、この周りの建物の多くは戦前からのもので、現在も似たような組織が使用しています。

また、多くの大学や研究機関で日本語や日本そのものが研究されています。多くの学生が日本語を学習し、各地で日本語の弁論大会が開かれ、留学や研究のために多くの若者が日本を訪れます。また日本のポップカルチャーが大好きな若者が多くおり、日本語学習の動機付けにもなっています。近年は中国人の所得の増加と共に、より遠くて費用のかかるアメリカやヨーロッパへの留学も選択できるようになってきたため、日本語学習者が漸減傾向にあることが少し残念です。

余談ですが、日本と中国の漢字を通じた交流について触れます。東アジアは漢字文化圏とも言われ、中国発祥の漢字が周辺地域でも意思疎通や情報伝達の手段として広く使われてきました。また近代の日本はいち早く西洋文化を導入し、西洋の概念を漢字で置き換えた和製漢語を作ったため、中国側が日本で和製漢語を学んで西洋を知るということも起きました。この点でも日中両国は重要な隣国であったわけです。「中華人民共和国」は日本がなければ出来なかった、といわれることがあります。これは国名7文字の過半数（「人民」「共和」）が和製漢語であることに由来するジョークです。

日本と中国の関係

日本と中国は長い交流の歴史の一方、先の大戦の歴史等を問題として現在でも対立が起きます。私が赴任する前年の2012年には、日本が尖閣諸島の私有地の所有権を国へ移転したことを、同諸島の領有を主張する中国側が問題視して、各地でデモが行われ、館もデモ隊に囲まれ投石を受ける事件がありました。その後も日中間で問題が起きると、在留邦人へ注意喚起したり、館の対外活動が実施困難になることもありました。

しかし、現地の日本に対する反応は多様で、厳しい反応を示す人がいる一方、日本へ留学や旅行した経験のある人を中心として、対立は対立と認識しつつ、現在の日本人や日本文化を知り、冷静に反応する日本の

よき理解者も多数います。また終戦記念日や満州事変の発端である柳条湖事件の日（9月18日）のように反日感情が盛り上がりそうな日でも、馴染みの店で普通に食事を取ることができます。彼らも日々の生活があり、各々考えを持つ人間であり、ある程度自由にインターネットを通じた情報がやり取りされる現在、反日だけに人生を費やしている暇はないようです。

日中双方のマスコミの報道も、視聴者・購読者の関心を集めるためセンセーショナルな映像や情報を競争して流す面があり、情報を受ける私たちも冷静、客観的に捉え、行動することも必要と感じます。

結び

現在の中国の都市部はモノにあふれ、また多様で優れた調理技術により、^{おいしい}美味しい料理が食べられます（一般的に食材の味、品質は日本の物が勝っていると思います。ただ、蚕の蛹のように馴染みのない食材が入った料理は自分にとってゲテモノですが）。某先進国を経験した方の話と比べても、日本人にとっては中国の方が充実した食生活を送れると感じます。

一方、水や空気的安全性については厳しい面がありますが（瀋陽でもPM2.5が1,000（ $\mu\text{g}/\text{m}^3$ ）を超える日もありました）、公害として広く認識されている現在、国民の声を受けて中国政府も少しずつ対応を進めているようです。反日行動然り、環境問題で中国旅行をためらう日本人も多いと思いますので、この点は早期に改善されることを期待します。（写真g）

政治的な問題による政府同士の対立は解決が難しいですが、引越しできない隣国同士、個人レベルでは折角なら仲良く付き合いたいものです。



写真g ある朝、自宅窓からの眺め（対比）
（中央左側、直線200m程先の建物が見えたり見えなかったり。空が澄み渡る日もありますが）